

12. 佐久地域の農村医療における看護活動の継承に関する研究（第2報）

～佐久病院建設期（1950年代）の看護活動～

依田明子¹⁾、飯島良子¹⁾、羽毛田博美²⁾、大淵律子¹⁾、東田吉子¹⁾

¹⁾ 佐久大学、²⁾ 了徳寺大学

キーワード：佐久病院、農村医療、1950年代の看護

要旨：本研究は、農村医療の先駆的役割を果たしている佐久総合病院における看護活動の軌跡について、建設期といわれる1950年代に焦点を当て明らかにすることを目的とした。1950年代に佐久病院に就職し看護婦（師）長経験がある3名を対象に半構造化面接を実施し、建設期の佐久病院の看護活動の実践とその活動を支えていたものは何かについて質的・帰納的に分析を行った。この時代の佐久病院の看護活動は、あらゆる病気に対応する多忙な日々であったが、常に医療の原点に沿った問いかけをしつつ地域住民のために献身的な看護活動が行われており、このことが佐久総合病院の看護活動の原点となっている。

A. 目的

農村医療の先進地域として国内外に知られている佐久地域は、昭和の時代には不衛生な生活実態の中で感染症、母子保健、成人保健等の健康問題を抱えていた。その中で佐久病院における1960年代の看護活動は、院内の各部門において看護師一人一人が考える患者中心の看護が主体的に展開されていたことを第1報¹⁾として報告したところである。

若月には佐久病院開院1944年から1951年までを第一期（準備期）、1951年からは第二期（建設期）と述べている²⁾。本研究では、第1報での活動の土台が作られた1950年代に焦点を当て、看護活動の実態等を明らかにすることを目的とした。

B. 方法

①グループインタビュー

対象者は、1950年代に佐久病院に就職し、婦（師）長の経験がある70歳代後半から80歳代前半の3名とした。選定理由として、佐久病院准看護学院で資格を取り、1950年代当時の看護活動を知りかつその後看護リーダーとして活躍した、インタビュー可能な者とした。1950年代の建設期における看護活動に焦点を当て、佐久病院で実践されていた看護の実態及びどのような思いで活動していたかについて、インタビューガイドを用いて半構造化面接法によりインタビューを行った。インタビューは2回実施した。1回目の実施後、2回目は1回目の詳細について語ってもらった。

②分析方法

得られたデータから逐語録を作成し、建設期の佐久病院の看護師の活動の実践とその活動を支えていたものは何かについて質的・帰納的に分析した。分析した内容からカテゴリを作成し、さらにカテゴリごとにま

とまった内容をコアカテゴリとして作成した。

本研究は佐久大学研究倫理委員会の倫理審査の承認を得て実施した。

C. 結果

分析結果から2つのコアカテゴリと13のカテゴリ、3つのサブカテゴリが抽出された。

コアカテゴリ1【佐久病院の看護の土台を創る】として、＜准看護婦の献身的な努力が病院の土台を創る＞＜病院を支えてきた准看護婦自身が時代の変化の中で揺れ動く＞＜准看護婦の教育は実践の中で培われる＞＜科を問わずいつでもどこへでも往診に出かける＞＜外来と病棟をつないでこそ看護実践の意味がある＞＜看護部としての研究活動の取り組みが芽生える＞＜入職時から当たり前に住民の健康管理活動を行う＞の7つのカテゴリが抽出された。

また、コアカテゴリ2【佐久病院らしさは人を育てる】として、＜日常の仕事の中で患者を一番に考えることの意味を問われる＞＜全体会議は職員の意識統一の場となる＞＜院内の行事や文化活動は人とのつながりを実感できる＞＜自由な発想が人を育てる＞＜病院の日常の中の歌声に癒される＞＜地域の人たちの支えに誠心誠意のおもてなしをする＞の6つのカテゴリが抽出された。

さらに、コアカテゴリ2に含まれるカテゴリ＜院内の行事や文化活動は人とのつながりを実感できる＞のサブカテゴリとして〔各科で競い合った余興に職種を超えた仲間意識が芽生える〕〔病院祭の各科で手造りする醍醐味を体験する〕〔一つの目標にむかい一生懸命になれる

仲間を実感する〕の3つのサブカテゴリが抽出された。

表1 佐久病院の建設期（1950年代）における看護活動

コアカテゴリ1 【佐久病院の看護の土台を創る】		
カテゴリ	<准看護婦の献身的な努力が病院の土台を創る>	
	<病院を支えてきた准看護婦自身が時代の変化の中で揺れ動く>	
	<准看護婦の教育は実践の中で培われる>	
	<科を問わずいつでもどこへでも往診に出かける>	
	<外来と病棟をつないでこそ看護実践の意味がある>	
	<看護部としての研究活動の取り組みが芽生える>	
	<入職時から当たり前に住民の健康管理活動を行う>	
コアカテゴリ2 【佐久病院らしさは人を育てる】		
カテゴリ	<日常の仕事の中で患者を一番に考えることの意味を問われる>	
	<全体会議は職員の意識統一の場となる>	
	<院内の行事や文化活動は人とのつながりを実感できる>	
	サブカテゴリ	[各科で競い合った余興に職種を超えた仲間意識が芽生える]
		[病院祭の各科で手造りする醍醐味を体験する]
		[一つの目標にむかい一生懸命になれる仲間を実感する]
	<自由な発想が人を育てる>	
<病院の日常の中の歌声に癒される>		
<地域の人たちの支えに誠心誠意のおもてなしをする>		

D. 考察

佐久病院の第二期（建設期）といわれる1950年代の看護は、看護職全体の半数を占めていた准看護婦（師）が中心となり、院内であらゆる病気に対応するなど多忙な中、地域に目を向けた活動もまた献身的に行われ、院内外に向けた看護が行われていた。どこの場所においても、その現場には常に「人間とは、医療者とはどうあるべきか」「医療は何のために、誰のために」という問いかけがあり、看護学生もともに学びながら看護を実践していた。

また、佐久病院の第一期（準備期）から行われている全体会議や病院際、文化活動は、そこで働く職員にとっての意志統一や、仲間としての一体感、達成感を持つ場となっていた。また、病院祭や文化活動は、自由な発想が出せる場であり、同じ思いを持つ仲間としての団結力が育てられていたと考える。その発想が住民のための活動であれば職種を超え後押しをする共同体制ができる土台が創られてきた。これらの活動は、看護師としての成長を実感できる機会ともなっている。

この時代の看護活動は、現場での実践の中から医師とともに学び、かつ自分たちの看護を探りながら活動していたことが明らかになり、患者や住民の命と健康

を守る視点に立ち、患者中心の看護サービスを提供するという現在の佐久総合病院の看護活動の原点となっていると考える。

E. まとめ

佐久病院の建設期である1950年代の看護は、院内ではあらゆる病気に対応し、かつ地域に目を向けた活動にも取り組み、院内外に向けた看護が行われていた。多忙な中ではあったが、常に医療の原点に沿った問いかけをしつつ、地域住民のために献身的な看護活動が行われおり、現在の佐久総合病院の看護活動の原点となっている。

F. 利益相反

利益相反なし

G. 参考文献

- 1) 羽毛田博美, 依田明子, 東田吉子, 他: 佐久地域の看護活動の継承に関する研究—佐久病院の看護活動を通じて(第1報). 第30回日本国際保健医療学会東日本地方会抄録集: 45, 2015.
- 2) 若月俊一著: 村で病気とたたかう. 岩波書店: 79-80, 2002.